

まったく食べない フランス人の思い出

今年のパリ・シーマシヨウに行かれた方たちは、どのような成果を得たのだろうか。「こんな農機具があった。よし！ 将来自分も使ってみよう」なんて勘違いした農家もいたのだろうか。しかし本当の勉強は**農業機械を見るだけではだめ**だ。網膜から入った情報が視神経を通り大脳にたどり着くまではいいが、その先の神経伝達物質の生成が悪いので記憶細胞が蓄えられない（正しくは拒否反応を示す）農家が多くいることを知っている。間違ってもこれを読んで交感神経が働きアドレナリンを多く作り、興奮状態に陥ってしまったてはいけない。本当の勉強、すなわち会場の2階で行なわれていたヨーロッパの最新農業情勢などを、本場もんのフレンチで話された無料セミナーに感銘を受けた農家もいたのならば、その情報を教えていただきたいものだ。

前回のフランスがどれほどレ・ミゼラブルな国であるかの続きだ。12年前、数名の農家とパリ滞在中に予定どおり、いやなことがあった。ホテルに着き、数名と夕食をとることになり、ホテルそばのレストランに入った。

案内された席に着く前にアメリカ人ツアー客とすれ違い、彼らの座っていた席の隣に陣取ることになった。ウェイターが注文を来る前に米国人が座っていたテーブルを見ると英語のメニューが置いてあり、メニュー下の価格の注意書きにはVAT(付加価値税)込みの価格ですと書いてあった。その時はフーロソウと思ったが後から面白いことになった。

その後、ウェイターが来て「日本人か？」と聞いてきたので「ウイ」と答えると、親切に日本語のメニューが出てきた。その瞬間「あっ、やるな」と思った。もともと、日本語で書かれていてもどのような料理か全くチンプンカンプンなので、この様な時に使う便利な方法を思い出した。それは近くの食事中のテーブルを見て「アレとアレ」で注文すれば良いのだ。基本的に分からんメニューを読む必要はない。ある北見市常呂町のかつ飛びランクルに乗る人は3000円のワインを一口飲んで「5000円のコンビニのワインと同じ味だ

Vol.13 「ボロ」を出さない「プロ」



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

な」と言ったので、「本当に良いワインはこんなものでしょう」と慰めた。食事中は、今回のツアーの目的である、フランス農業ではすでに緑ゲタ政策が導入されている：…などの話で盛り上がったことを覚えている。

食事が終わり清算することになり、「×××フラン也」と言われたので、私は「明細を見せてください」と伝え、中をのぞ

オレにも 言わせる!

北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信

いてみるとやはり「VAT」は別途、確か19・5%請求していた。そこで「VATですか?」と言いつつ、次に「英語のメニューを見せてください」とキヤッシャーに伝えた。ところが彼は私の流暢なフランス語が理解できなかったと見えて、「VAT」の説明を始めたので、もう一度「英語のメニューを見せてください」と言うと、「ちょっと待ってください」と答えた。しばらくして上司が出てきて、同じ説明を繰り返した。また私は同じことを言うと、その上司は「バレたか」と言う表情をして「今回は「VAT」を取りません」と言った。

もう皆さんはご理解していただけたと思いますが、当時の日本は消費税表示を外税でヨーロッパは内税になっていた。たまたま英語のメニューを読んだので理解できたが、普通であればだまされたのだろう。もちろん最低限のチップは置いてきた私は、**常識人**である。

早い話ヨーロッパ人はケチでうそつき、プライドの高い貧乏、見かけはきれいな服を着ているが、よく見るといつ洗濯したの? という感じ。頭は日本人並みにいいが、決して素直ではない。最後に責任転換上手は米国人の比ではない。本当にこんな国民にまともな農機具が作れるのかとても疑問である。ドイツより

もフランスの方が、1人あたりの経営面積が大きいことは皆が知っている。つまり民族性よりも農業というマーケットがフランスに存在しているから可能ということなのだろう。そして、この極東アジアの民にも一人あたり100ha規模の農業というマーケットが存在したならば、民族性は関係ないことの証左になるのか。

フランスはトンデモナイ国のような表現をしたが、例外がある。マドマゼルは痩せていて美人が多いのは間違いないようだ。

でも、日本人はどうかと言われると、どうなんでしょうね。先頃、読売新聞と英国BBCが行なった世論調査で「日本という国が世界に及ぼす影響はよい」という意見が56%にもなったという。そう言われると、ある地域では誇りある日本人は尊敬され、モテモテのようだ。

第二次大戦で米軍は442連隊、第100大隊の日系人を前線に送ったという史実がある。この日系部隊はおおよそ1万人が参戦したが、名誉負傷勲章は1万8000人。つまり戦線を離れて帰国できる権利を持ちながら戦地を離れず複数回、負傷したことになる。

ある戦闘ではテキサス出身の白人200名の部隊を助け出すために日系部隊は「バンザイ」と言いなが

ら800名が死傷している。そしてこの戦闘に参加した兵士の中に自分の子供たちが「グランパ」と呼んで親しむ、私の畏友ヘリー・ミナト二等兵がいたことを付け加えておく。

カエルの面に小便、 ですかね?

がなりさんとの「舌戦」の続きだ。がなりさんからはコミュニケーション不足を指摘された。多分そうなのだろうと自分でも思う。なぜなら自分の生計である大豆、麦栽培を行なっている限り、農水の政策の中でゲコゲコ飛び跳ねているように見えるのだから。その農政のご指示通りに行なえば、それなりの収入が約束されるのは間違いない。

1970年の休耕、翌年の転作からこんなことを40年やって、予算配分の恩恵をたっぷりいただいているのだから、表には出さず、日陰の存在で一生が終わるのだから、なんて考えたこともある。しかし、時代がそれを許さなかった(カッコ良いね)。自分が真面目にやっているのだから他人様(他農家)も真面目にやっていると思つたが、よく言えば反骨主義、独立心が強い、しかし現実社会の仕組みが分かっていない反政府主義者ばかりであったのは、先週の本稿でも伝えた。

大豆・麦といった農政と密に関連する農産物と、野菜・果物などの農産物では消費者や流通にかかわるときに、コミュニケーションのやり方、必要性が違ってくるのは当然である。やはりお互い「プロ」なのだから「ボロ」を出さないように努力する必要はあると思つている。

そう言えば、がなりさんは「くすんだ目つき」のこともカチンと来られたようだ。**ご本人の名誉**のためにも説明するが、もちろんこの表現は、がなりさんのことを表現したわけではない。なお、今は削除されているが、You Tubeにあった『¥マネーの虎』では「経営者は人を騙してでも、金を取ってくる目をしていなければならぬ。あなたはそういう目をしていない(だからオレはあなたに投資するつもりはない)」と、がなりさんが発言されたのを拝見した。この言葉は、みんなが手を取り合つて「頑張りろ」などと余裕を見せている農村社会には実に刺激的、挑戦的であると感じた。

人の生き方はそれぞれだが、お手々つないだ農村社会を利(悪)用して生きている人々も少なからずいる。そのこと自体が、神に対する冒瀆としか思えないのも確かなことだ。そのような連中に私はこう言う。**悔い改めなさい。**